

# FRIENDS PROJECT 2010

## 目次

塩原研究会とは、フィールドワークについて、学習教室紹介	1・2頁
FRIENDS PROJECTとは	3頁
プロジェクトメンバー一覧	4頁
前期・後期活動実績	5頁
映像班活動紹介・報告文	6～18頁
活字班活動紹介・報告文	19～32頁
対話班活動紹介・報告文	33頁～41頁
指導教員より	42・43頁
FRIENDS PROJECT2011の展望	44頁

## <塩原良和研究会とは>

塩原良和研究会（以下塩原ゼミ）とは、2008年度秋学期に開講した慶應義塾大学法学部政治学科、国際社会学を主な研究対象としている研究会です。2010年度は海外に留学中のゼミ生も含めて4年生14人、3年生18人で活動しており、それぞれ十人十色の興味分野を研究していますが、そんな中、32人共通のトピックとして勉強をしているのが、「日本における多文化共生のあり方」についてです。塩原ゼミでは、文献講読のほかに、外国にルーツを持つ方々やその支援に携わる方々にインタビューを行ったり、協働実践を企画したりと、肌で人と社会を感じる時間を大切にしています。

## <フィールドワークについて>

塩原研究会は大学内で勉強をするだけでなく実際に外国人住民の方々の生活する地域に足を運び、ボランティア活動などを通じて現場の目線から多文化共生について考える「フィールドワーク」を大切にしています。具体的には神奈川県川崎市や鶴見区を拠点とする外国人住民支援団体のご協力を得て、外国人児童の勉強を補佐する「学習サポート」活動を行っています。教科書や宿題の難しい部分を解説したり、一緒に入試対策をする事などを通じて信頼関係を深めつつ、彼らを取り巻く学習環境や社会的環境について考察を行う事がこの活動の主な目的です。また勉強をするだけではなくレクリエーションや映像制作などの課外活動を協同して企画・実行する事で、人と人がより良く繋がる事ができるコミュニケーションやコミュニティの可能性についても追求します。

## [学習教室紹介]

本年度の塩原研究会の学習サポート活動は、開講当初からご協力を頂いている「社会福祉法人青丘社 ふれあい館」に加え、「NPO 法人 ABC ジャパン」の協力を頂き、計四つの学習教室を中心に行いました。

### ・ふれあい館

本年度もふれあい館では週2回の学習教室が開かれ、毎回約3~4人のゼミ生が子ども達の勉強の手伝いを行いました。また土曜日学習サポート終了後の時間（午後3時以降）は「文化プログラム」と銘打ち、前期はフィリピンコミュニティの方々のワークショップに参加し、後期はふれあい館の高校生と協同して（撮影・編集も高校生が担当）、映像作品を作りました。

・潮田小学校国際教室（横浜市鶴見区）

潮田小をはじめとした鶴見・川崎地区は外国につながる子どもたちが多くとされ、彼らのルーツは、中南米、韓国・朝鮮、中国・台湾、アメリカ、ガーナ、ロシア、フランスと多岐にわたります。その中で教育方針を「差別しない、されない、許さない子」として、生徒全員が仲良く学べる環境を作っています。

ゼミ生は毎週水曜日の放課後国際教室に通い、宿題の手伝いを中心に子どもの学習サポートを行っています。秋学期からは漢字学習の一環として子どもたちと一緒に漢字かるたを作っており、12月15日にはかるた大会を行いました。

・鶴見夜教室

鶴見夜教室は、2010年4月よりABC JAPANとともに塩原良和研究会が開催している学習サポート教室です。毎月第二・第四・第五土曜日、午後4時から午後7時に鶴見区に住む外国につながる中学生と共に塩原ゼミの3・4年生と一緒に勉強をしています。2011年1月現在、中学生は3～10人前後、大学生は4～10人が毎回集まり、英語や数学のテスト勉強や高校入試に向けた面接練習などを行っています。2010年11月までは、ABC JAPANの事務所で教室を開いていましたが、2010年12月より鶴見国際交流ラウンジに教室を移し、より広い環境でホワイトボードを使いながら伸び伸びと勉強が出来るようになりました。

・鶴見学習支援教室(つるみ朝教室／第1、3週)

鶴見学習支援教室は、横浜市鶴見区が、NPO法人ABC JAPANに委託し、開催している学習サポート教室です。毎月第1・3土曜日の午前10時から12時まで、地域のボランティアの方々や大学生が、主に小学生の学習を支援しています。教室は、鶴見区の区民活動センターで開かれ、毎回10～20人前後の子供たちと、10～20人前後のボランティアが参加し、子供たちが学校の授業で追い付けなかった部分を、マンツーマンに近い形で補っています。

塩原ゼミ生は、子供たちの学習支援を行うと同時に、子供たちが教室に来やすくなるように、7月と12月に2回、レクリエーションを行いました。

## < FRIENDS PROJECTとは >

2009年に始まった、塩原良和研究会の大学生と外国につながる子どもたちの協働プロジェクトです。ゼミ活動をきっかけに、学習サポートという形で外国につながる子どもたちと出会ったゼミ生は、普段は日本社会で息苦しい思いを経験することが多いにも関わらず、いざ自分の興味分野となるといきいきと活動する彼らに魅力を感じ、何かを一緒に始めたくなりました。それが、映像作品の作成を中心として協働を実践し、互いに自己表現と自己肯定の機会を得ることを目標とした本プロジェクトです。昨年度は、①ゼミ生とふれあい館の高校生によるミュージックビデオ②中学生が将来の自分に向けて送るビデオレター③フィールドワークと FRIENDS PROJECT についてゼミ生が思索するドキュメンタリー、の三本の映像作品を製作しました。そしてふれあい館で一回、慶應義塾大学内で二回の映像上映会を行い、上映会の参加者と共に望ましい多文化共生社会の在り方についてディスカッションを行いました。

### < FRIENDS PROJECT 理念 >

関与 対話 対等 変革 希望

「関与」：自分とは異なる他者とひとりの人間として関わりあい

「対話」：誠実な話し合いのなかから

「対等」：目の前の相手となるべく対等な関係を築き

「変革」：そこから社会全体を変えていく

「希望」：その可能性について希望を持ち続ける

本年度の FRIENDS PROJECT ではゼミ生が、①映像作品の制作を行い、日本人の国民性や外国人に対する意識を炙り出す「映像班」②子ども達に言葉の持つ楽しさや、言葉で自分を表現する事の喜びを感じてもらう為の活動を行う「活字班」③ワークショップやディスカッションの開催を通じて、望ましい多文化社会の在り方について対話する「対話班」の3つのチームに分かれ、それぞれ異なった視点から日本社会の現状や外国につながる子どもたちとのコミュニケーションについての思索を深めました。また上記のチームとは別に、昨年度は「出演者」であったふれあい館の高校生達が「製作者」となり、ふれあい館のプロモーションビデオとショートフィルムを製作する「文化プログラム」という活動が土曜日を中心に行われました。

活動の過程において「友達 (FRIENDS) が計画 (PROJECT) の対象になるのはおかしい」という異議が唱えられ、FRIENDS PROJECT を「暫定的な仮称→FRIENDS PROJECT (仮)」とするという方針が提案されました。本報告書では便宜上 (仮) を付けずに表記をしますが、報告文中に出てくる (仮) とはそうしたゼミ生の問題意識を表しています。また適切なプロジェクト名の名付け直しについては、来年度の研究会の活動で行う予定です。

## <プロジェクトメンバー一覧>

### <指導教授>

塩原良和

### <映像チーム>

畑宗太郎	宮本翔太	今村菜穂子
井上翠	小野沙織	松尾幸明
向井貴信	村松康彦	米谷卓
	山本杏奈	

### <活字チーム>

菊池美峰	木村友紀	蜂屋絵美里
服部菜央	福元理央	吉村麻友子
浅野理衣	池田裕美	小鞠誠人
佐々木一穂	新毛聡一郎	引間美沙子

### <対話チーム>

飯塚美樹	大川史織	高橋研一郎
徳島えりか	橋詰美緒	細田瑞穂
榎本沙織	奥村奈央	君島龍一
	佐藤美織	

### <文化プログラムチーム（各チーム混合）>

	ふれあい館の中高生 (約10名)	
大川史織	高橋研一郎	畑宗太郎
池田裕美	小鞠誠人	松尾幸明
	中西良介 (OB・編集アドバイザー)	

### <協力団体>

社会福祉法人 青丘社 ふれあい館  
NPO法人 ABCジャパン

## <前期の活動>

4/13 2010年度塩原研究会開講
5/13 前期フィールドワーク開始 (以下、7月10日まで学習サポート活動を継続)
5/29 いちよう団地見学 @神奈川県大和市
6/2 高校生キャンパスツアー @慶應日吉キャンパス
6/5 ふれあい館まつり&インタビュー会 @川崎&鶴見
6/19・26、7/3・10 『「多文化」社会のエンパワーメント』講座 @川崎
7/13 前期プレゼンテーション大会 @慶應三田キャンパス
7/17 ツイスターゲーム大会@鶴見

## <後期の活動>

9/16 ゼミ一日研修
9/28 FP 実践企画案プレゼン 企画を先方に提案・打ち合わせ
10/9 後期フィールドワーク開始
10/下旬~12月上旬 各班学習サポート・実践活動 (後述・報告文参照)
12/15 潮田小学校カルタ大会
12/18 紙相撲大会
12/25 クリスマス教室
1/22 文化プログラム映像上映@ふれあい館
1/29 FRINEDS PROJECT 報告会

塩原研究会では先述した学習サポートのみならず、高校生を大学に招待するキャンパスツアー、ふれあい館で開催するお祭りのお手伝い、ゼミ生が企画したお楽しみ会などの様々な活動を通して子ども達との交流を深めました。こうした活動から得た学びや知見をゼミ生が解釈、省察し、映像表現・活字表現・ワークショップなどの形でアウトプットしたものが本年度の **FRIENDS PROJECT** の活動内容です。次頁より詳述します。

## <各班活動紹介① 映像班・文化プログラム>

映像班は慶應義塾大学三田キャンパスを拠点とし、エスニシティ、グローバリズム、アイデンティティといったテーマについての自身の考えを表現した映像作品を製作しました。また文化プログラム班はふれあい館を拠点とし、ふれあい館の学習サポートの様子を記録した映像作品を学習サポートに通う中高生と協働して製作しました。

### <映像班製作作品>

#### 作品①『ちょっと視力検査』

製作メンバー：畑宗太郎、松尾幸明、村松康彦、米谷卓、山本杏奈  
1～3分の短い映像の中に、日本人であること、外国人であることを巡る問題提起や、異議の申し立てがなされています。

#### 作品②『SAN』

製作メンバー：今村菜穂子、小野沙織、山本杏奈  
「塩原ゼミは野良猫の集会所」というコンセプトを元に、猫の目線から自己のアイデンティティや社会学という学問について問いかけを行う映像作品となっています。

#### 作品③『NO→』

製作メンバー：井上翠、宮本翔太、向井貴信  
3匹の動物が、民族や国民性について扱ったビデオを視聴する様子を人形劇で表現した、一風変わった映像作品になっています。

### <文化プログラム製作作品>

#### 作品①『人と人がつながるふれあい館』

#### 作品②『PEPSI』

製作メンバー：ふれあい館の高校生+高橋研一郎、畑宗太郎、大川史織、中西良介、松尾幸明、池田裕美、小鞠誠人  
『人と人がつながるふれあい館』は、ふれあい館での学習サポートの様子を記録した映像となっています。カメラも高校生が回しています。  
『PEPSI』は、高校受験の面接試験をテーマに、高校生のホンネを表現したものです。

① これが私の FRIENDS PROJECT だ！

今年度、私にとっての FRIENDS PROJECT (仮) とは「つながりをもつこと」でした。1年間のフィールドワークを振り返ってみますと、本当に多くの人と出会ったと思います。ふれあい館・abc の子どもたちを始め、学習支援に携わっている方々、川崎・鶴見に住む外国からいらした方々など、このゼミに入らなければ決して会うことはなかったことでしょう。私たちの出会いはまさしく「他者」同士の出会いであり、彼らにとって得体のしれない存在である私たちが彼らとふれあい、青丘舎の遠足や Y ちゃんのパーティーに招待して頂けるような関係性を築くことができたのは、奇跡に近いことです。私の実感として今年度の活動は、この奇跡的なつながり形成に終始していたように思います。私たちは恵まれていたことに大体の活動で好意的に接して下さる方々ばかりとお会いすることとなりました。お陰様で、各フィールドで多くの実践を行うことができましたが、私たちの実践は協働と呼ぶにはまだ早く、一方通行的な側面がありました。私たちの活動が彼らにとってどのような効用があったか、ある程度見えてくるようになるには今しばらくの時間が必要です。また、彼らにとって私たちの存在は何なのか、いまだに確かみできていません。次年度はこうした点に注意を払いながら活動していけたらと思っています。

② 映像班での活動

映像班ではアカデミックスキルズの方々と合同で上映会を行いました。また、映像制作を行っている外ド連の方と知り合う機会もあり、映像という媒体に期待する役割も作る人が違えばいく万通りにもなることを実感しました。そのような中で、私たち塩原ゼミは、映像に社会変革のツールとしての役割を持たせ、制作してきました。こうした映像は、今までその事実に興味関心がなかった人にも考えてもらえるように、誰が見てもわかる作品とすることが必須です。しかし、いざ作ってみるとその最低条件がなかなか達成できません。それは、映像を見せる対象や（同年代の人 etc.）、見せる場（YouTube、上映会 etc.）への配慮が足りなかったからでした。次年度以降、時間が許せば、いきなりの実践ではなく映像がどのような可能性を秘めているのか、映像のみならず活字や対話など、広く変革の手段について考えてみる機会も持てたらよいのではと思いました。

③ フィールドワークを通じて

4月から各フィールドに入っていて、「私の常識は本当に常識なのか？」という疑問を持つようになりました。Yちゃんの誕生パーティーで時間通りに会場入りしたゼミ生が白い目で見られ、また、ふれあい館遠足では普段なかなか体験できないような大雑把すぎるプランの遠足に参加しました。その中にいると、日頃時間通りが当たり前だと考えるもなく身につけていた価値観が大きく揺さぶられました。ゼミに入る前の自分であったら、「外国人は時間にルーズだから」と決めつけ終わっていたかもしれません。しかしながら、フィールドワークを通じて、彼らにとってみれば日本人は時間に厳しすぎると思うだろうな、と考えることが出来るようになりました。自分たちが絶対的に正しく、それにはまらない



人々は変な人たちというカテゴリー化をしなくなったのは、自分にとって大きな収穫です。

チーム：映像班（鶴見夜学習サポート）      氏名：宮本翔太

土曜の夜に学習支援が終わり、子どもたちが教室を退室すると、どっと疲労を感じる。その疲労は決して不快なものではなく、むしろ達成感を伴っており心地よいものである。しかしその心地よさは長くは続かない。すぐに自分の授業のいたらなさに考えがいくからだ。それは子どもたちの退室後に報告書を書くときである。毎回、報告書を書きながら、授業の効率性の低さや、手当たり次第に授業していたことに気づかされ、後悔を感じてしまうのである。この非効率な授業や、手当たり次第で無計画な授業の改善は、簡単なことではないだろう。生徒たちの多様性や教室の状況の流動性に対応するためには、何か一つのカリキュラムを用意すれば良いというものでもなく、この問題はゼミとして教室の経験値を高めていくしかないのかもしれない。

ところで、このような問題意識は、実は昨年度にはなかったものである。昨年の学習支援はそもそも回数が少なく生徒とのつながりもなかった。しかし、今年度は継続的につるみ夜の学習支援に参加することができ、より当事者となれたように感じる。それによって、何度も同じ場所を共有し、子どもたちに対するつながり意識も昨年よりは強くなった。そしてそのことが、生徒たちの将来に対して自分が無関係ではいられないという事実を目に向けさせ、授業の改善という問題意識につながったのではないかと今になって感じている。

チーム：映像（鶴見夜学習サポート）      氏名：山本杏奈

足早に鶴見駅の改札を抜け、15分遅れて、夜の学習サポートが行われる国際交流ラウンジに駆け込むと、教室にはゼミ生が勢ぞろい。一方、生徒たちはまだ一人も来ていなかった。それから30分以上待ち続け、今日はもう誰も来ないんじゃないかと思ったころ、ようやく1人2人と生徒が集まって来た。19時に終わる教室なのに、18時半を過ぎてからひょっこりやって来る中学生もいる。それで、適当に世間話をして帰る。けれど私は、そんな“ゆるい”鶴見夜教室も悪くないと思っている。年末最後の教室の日に、そう改めて確信した。

その日も例によって、だいぶ遅くなってから、Tが照れくさそうにドアの窓から顔を覗かせた。教室に入って来るなり、リュックを広げて、あっと声を上げる。ちらっとこちらに視線を向けながら、「教科書間違えた」と小さく呟いた。見ると、中学2年のTのリュックの中には、中学1年の国語の教科書しか入っていなかった。「おいおい、確信犯なのはわかってるんだからね」と言う私たちの反応を待っていたかのように、「困ったな一困ったな

一」とわざとらしい名演技を見せるのだった。

結局、中学1年の漢字を復習することになり、漢字クイズをいくつかやって、おやつを食べて終わりの時間になった。この日Tは、まったく集中して勉強できなかったし、おそらくはじめから勉強しようというつもりもなかった。そしてそれをその場にいた誰一人も真剣に咎めようとしなかった。Tはここに、成績を上げるために勉強をしに来ているのではなく、“会話”をしに来ているということ、なんとなくみんなが分かっていたからではないだろうか。

たとえば私たちが塾に行く時、まず学習をすることが目的なのは当たり前であって、わざとテキストを忘れてくるぐらい勉強したくないのなら、そもそも塾に行かなくなるだろう。でもTは、(なぜか小学1年生の妹の可愛いブルーのリュックをしょって)、必ず来る。ゼミ生がトイレに行くと、教室のドアに鍵をかけてふざけたり、「俺にできないことは何もない！」という名言を言ってみたり・・・私たちゼミ生との会話を楽しむために、ここに来ているとしか思えない。私たちが春から続けている鶴見夜教室は、生徒たちにとって、少なくともTにとって、居心地のいい場所となりつつあるのではないだろうか。その意味で、それは、私たちが持っていた“外国につながる子供達の居場所づくり”という裏目標が、なんとなく実を結んでいるということかもしれない。

もちろん、学習サポートの目的は、まず学習サポートにあることが大前提である。だから、こんなことを報告書に書いたら、富本さんや塩原先生や生徒達の家族や、そのほか、この教室に関して尽力してくださっている方々が、心配されるかもしれない。大学生と中学生がただ遊ぶために提供されている場ではないと、お叱りを受けるかもしれない。そこで、これは学習サポートの一部分を切り取ったエピソードであって、大概は、生徒もゼミ生も真剣に勉強に取り組んでいることを、ここに加筆させていただきたい。ただ、それでも私がここに書きたかったのは、春に会った時にはほとんど目を合わせて話をしてくれなかったTが、今は、わざわざ家からネタを仕込んでまで、私たちに笑わせてくれているという事実が、私にとって素直に嬉しいということだ。それは、1年フィールドワークをしてきた意味を、私に与えてくれた気がするからである。

そして次なる鶴見夜教室の私たちの目標は、もちろん、Tに真面目に勉強してもらうことだ。

対話チーム（文化プログラム） 氏名：高橋研一郎

今年の FRIENDS PROJECT は去年に比べると淡々と進んだように思える。去年と同じく、今年も映像を使ったプログラムに参加することができた。川崎市ふれあい館に通う高校生たちと、同施設で毎週木曜と土曜に行われている「学習サポート」の様子を撮影して、紹介 VTR のようなものを作った。撮影、編集ともに子どもたちオンリーでやり、学生たちはカメラに触れず、編集過程でもアドバイスしか出さない。それが当初の方針であり、理想でもあった。この方針は去年の反省に基づいている。去年も同じように高校生と映像を作成したのだが、企画から編集まで全て大学生が行った。これでは、何にもならないだろう。なので、今年は完全黒子になってみたらどうなのかと思った。だから、カメラに学生はノータッチというルールを課した。結局のところ高校生も大学生も共にカメラをいじって遊ぶことになった。僕ら学生はまだ子どもで、完全に黒子にはなりきれなかった。これは失敗だなど思いもしたけれど、よくよく考えてみたら、「楽しむこと」が一番大事なのだと思った。東久保・ブラジミール・ヨシキ監督の短編映画「PEPSI」の追加撮影は、大学生もアイデアをいくつか出して監督に選択してもらった。これがけっこう楽しくて、学生もカメラを回した。「楽しむ」にはゆっくりと時間をかけなければならないだろう。ゆっくりと時間をかければ、そこに余分な会話が生まれる。その余分な部分にこそ、何か大切なものが潜んでいそうな気がする。

チーム：映像班 氏名：畑宗太郎

私にとって、今年の FRIENDS PROJECT にはふたつの意味合いがあった。ひとつは、去年の継続として、去年と同じ子どもと同じ場所で活動を行うこと。そしてもうひとつは、新しい境地に足を踏み入れること。

前者は川崎のふれあい館の学習サポートと、文化プログラム（文化P）としての活動である。私は昨年、ふれあい館の中学3年生と一緒に「自分マップ」をつくり、それまでの自分の歩んできた人生を振り返ると同時に高校入試に向けた自分の見直しという活動に参加し、それを最終的に一本の映像にまとめた。その中学生たちは今年は高校生としてふれあい館に来ている。彼らを巻き込んで、ふれあい館というある種、彼らの原点でさらに発展した活動を行うことに、継続性というキーで私は重要性を感じていた。それには、昨年度末の反省がある。「FRIENDS は期間限定の＜友達＞なのか」。プロジェクトの課題をクリアしたあとに、現場から大学生は消え、何も残らなかった。これは現場の側から明らかに指摘されたことではない。しかし、それに気づいた私たちは、おそらく自分には誠意が欠けて

いると感じた。その気持ちをもとに、私は川崎に通った。

今年の学習サポートは、新しいメンバーを迎え、フリースクールの開設とも相まってより活発な空間となっていたように思う。それでも相変わらず原先生は時間になっても姿を見せない生徒に神経を使い、終わりの時間となればおやつが配られる。そして子どもたちの能力は驚くほどに高い。彼らの発言の重みと、思慮の深さは私をしてその言葉を聞けるということに感謝の気持ちを抱かせる。学びの日々である。

文化Pは、子どもたちのシネリテラシーという観点から考えられた。私たちは、昨年度末の春合宿でオーストラリアで行われたシネリテラシーに関する実践のビデオを見、子どもたちがカメラを持って、編集作業まで行うというのは、よい自己表現の場になると考えた。昨年度には子どもたちとの「共同作業」を歌いながらも結局全て編集作業は自分たちでやってしまったという反省があった。具体的には、ショートフィルムとふれあい館の紹介という形で作品ができた。ショートフィルムは、内容も斬新なものとなった。発案も生徒の方から出てきて、撮影後の編集作業でも、普段は真面目でおとなしい子が映像編集の才能をふんだんに発揮した。つなぐところはつなぎ、切るところは切る。ふれあい館の紹介ビデオは、インタビューを撮影するという方法で行った。普段はふざけてばかりの子も、カメラの前では少し緊張気味。普段はそこに埋もれていた子も、カメラを持つと、とても面白いアングルから撮っていたりする。普段とは違った側面を大いに発揮できた実践だと思う。

一方で文化Pとは離れて、私は映像班に属した。テレビCMのように、短い丈の映像を広く観てもらふことによって、一般の人にも問いかけを行おうという映像を考えるのに労力を使った。これは私たちにとって未踏の分野であった。主なテーマは「外国人と日本人」。その間にどんな差があるのか、と問いかけるような作品を目指した。と言っても、なかなかいい案は思い浮かばなかった。これは、おそらくかなりの積み重ねが必要なのだと改めて実感。ただし、もともになるアイデアや経験は教室だけでなく実践を通して得ているということは大きな違いなのだと思う。そこを具体的なアイデアとして、しかも多くの人に見てもらえる、考えてもらえるようになるためには、周りの一般の人たちが外国人をどう認識しているのかという実情を知る必要もあったのかもしれない。

昨年に比べ、大学の外に出て行く、社会にコミットするというベクトルは大きくなってきたように思う。これは私は必要なことだと思う。しかし、実践先の子どもたちのことや基本的な方向性を忘れて、道を踏み外さないように気をつけなければならないということを肝に銘じたい。

◇ふれあい館文化プログラム

文化プログラムは、聞いていた通りプロジェクトの進行はゆるやかだ。浜町のオフィスにはYとときどきSが来るくらいで、たいてい高校生よりも大学生の人数の方が多かった。

自然と私はYと話す機会が増えて、いつの間にか連絡先を交換していた。私が寒がっていたら自分のジャケットをそっとかけてくれたり、アイフォンの操作でわからないことがあると最後まで丁寧に教えてくれたり、Yの気遣いに度々触れることとなった。大学生とフレンドリーに絡んでくれる一方で勉強するときの集中力は非常に高く、テストの復習だといって紙いっばいに小さな字を敷き詰めているのを見たときはものすごく驚いた。そのYが映像の編集にやる気を見せてくれたのはとても嬉しいことだった。中西さん、ケニーさんの指導のもと楽々と機械を使いこなすのには感心したし、

Y：準備はいいですか

みんな：はい

Y：カメラまわします

私：さんん、にい・・・(カチッ)

などと本物の撮影現場さながらのやり取りをみんなでたどたどしく真似したときは本当に楽しかった。それ以外の映像を撮った日に私は立ち会えなかったのだが、映像からはふれあい館の子どもの素顔を見ることができた。ぶれながら人の顔でいちいち止まる映像は人の表情に自然と注意がいくし、S兄弟、ケニーさん演じるショートムービーは権力構造を笑いながら覆しているという評価もあるが、単純に彼らの別の一面を見ることができて新鮮だった。

文化プログラムとは違うが、年末最後のフリースクールの集まりも印象的だった。大学生と子どもがペアになってみんなの前でお互いの紹介をするといったワークショップのあとに、一人ひとり作文発表があった。Mの作文にあった「夢がたくさんあったら全部叶えられるかもしれないのに、なぜ一つしか持とうとしないのでしょうか」という問いかけにはっとさせられた。「ネパールではこんなにたくさんの方の人と友だちになることはなかった」という言葉からは、私たちが「日本人 - 外国人」と一方的に一括りにして見てしまいがちな関係を解きほぐされたような気がした。ふれあい館に人々が集まってくるのは、「楽しさ」という要素が子どもたちの間できちんと実感されているからなのかもしれない。

昨年度できなかったことを、今年度できたもう一つの試みとして、ふれあい館に通う子どもたちと行った文化プログラムの活動がある。昨年度はF Pの活動を撮影し、編集し、上映するという一連の過程すべてがゼミ生の手任せに委ねられていた。そのため、協働実践という名でありながら、どこからどこまでが協働であるのか、終始疑問が消えることはなかった。その結果、出来上がった映像作品も、その悩みにフォーカスした作品に仕上がりに、当初の目的である彼／彼女らの居場所づくりやエンパワーメントするようなものになったかどうかは確信が持てず、自分たち自身のポジションや活動について省察を繰り返すばかりだった。そのため、今年度はまず物理的制約を課していた映像編集を行うパソコンの設置場所を、研究室から活動場所であるふれあい館近くの教室に移動させることで、子どもたちが撮影した映像を、子どもたち自身が編集することができるようにした。映像制作に興味を持つかは個人差があるため、最初はやや押しつけのようになってしまった感も否めないが、徐々に興味を持ち始めた高校生には、自分から積極的に撮影・編集を行う姿が見られた。そのような機会を作れずに最後まで進んでしまったことが一番の反省点であり、今年度の課題であったため、昨年度夢に見た光景を、今年度は当たり前のように実践することができたことは非常に嬉しかった。印象的だったのは、ある高校生がカメラを持って積極的にゼミ生に質問をし、質問されているゼミ生が恥ずかしがっている様子が、昨年度の立場と逆転していたことである。カメラの暴力性ばかりに目がついてしまった昨年度と比べると、今年度はカメラが玩具のように、コミュニケーションの潤滑油として機能していた。それは、まさしくF Pが一方向の関係性から、双方向的なものへと変化した姿であるといえるだろう。来年度は、どんな関係性が生まれるのか。今後の展開からますます目が離せなくなった2年目のF Pであった。

チーム：映像班

氏名：向井貴信、村松康彦

※向井・村松の対談とイメージ映像を収録しました。コードを読み取ってご覧ください。



考えすぎて周りが見えなくなるところ。自分の悪い癖だと、よく思う。塩原ゼミに入り、外国に繋がる「子ども達」のことを少しずつ知り始め、実際に会うようになって。最初から僕はカベを作ってしまった。自分は「無知な日本の大学生」であり、相手は「外国に繋がる特別な事情を抱えた『子ども達』」なんだ、意識して相手を尊重できるように努めなければいけない、相手を傷つけるようなことをしてはいけない。明確な決意とかがあったわけではないけれど、無意識にそう考え、構えていたのだと思う。

けれど、僕が出会ってきたのは、いつも接しているのと何ら変わらない人々だった。なかには家庭に複雑な事情を抱えている人もいるし、経済的な問題に苦しむ人もいる。でも言い換えれば、それだけだ。彼（彼女）ら自体は何も自分達と変わらないし、でも全然違う。つまり、人間としての多様性は認められるべきだが、同じ「人間」であることはそれ以上に認められなくてはならないはずではないか。

外国に繋がる「子ども達」に差異を見出すのは、常にそれ以外の人間だ。日本で生まれ育ったにも関わらず、行ったこともない「母国」に強制送還される人、ビザが切れているというだけで不法滞在者、犯罪者だと決められてしまう人。彼らに問題があるのではない。彼らは無理矢理に差異を指摘され、本人の意志に関わらず差別的待遇を受けることを強要される。

そういう人々の問題を議論するために名づけられた「外国に繋がる『子ども達』」という名前、この名づけるという行為もまた、彼らの差異を強調するという機能から自由にはなれない。同じ「人間」であるということが分かっているにもかかわらず、差異を見出しながらでなければ論じることができないジレンマ。

議論をすればするほど、「自分」と「彼ら」の距離が遠くなってしまふような錯覚を覚える。ゼミ生がこの一年悩み続けた、研究対象として論じることに対する違和感（菜穂子が言うところの「箱庭感」）はこの点に由来するのだと思う。だから頭の中ではなく、実際に生身の「彼ら」と接することが必要なのではないか。そうでなければ議論を深めるほど、差異を見出せば見出すほど、頭の中の「彼ら」は自分達と違う存在に感じられてしまう。

実際に接し、対話してみること。「なんだよ、自分達と同じじゃん」と感じるその瞬間。そのフィーリングと、それ自体の大切さを知れたことが、この一年の成果だった。



チーム： 映像班      氏名： 米谷卓

今年の活動を振り返って感じる事は、目先の結果や手段にこだわり過ぎて、実は全く現場に「誠実」でなかったということ。Friends Project（仮）とは一体何なのか分からないまま映像班に所属した私は、最初からこういったメッセージを世の中に発信したいと考え、それに一番適した媒体が映像であるという判断を自らで行っていなかった。ただ単に対話、活字、映像班に分かれるのであれば、私は映像が作りたい、そんな思いのみで参加していた。そのスタートの仕方で既に私はフィールドにいる子供達を悪く言えば映像の「ネタ」として見てしまっていたのかもしれない。

その後、私は苦戦を強いられた。フィールドワークでつるみ朝の学習サポートをメインに関わっていった訳だが、「先生」と「生徒」の関係以上を築くのが難しい構造をしていたし、毎回触れ合った子供は違った。そうすると、学習サポートに慣れていない私は「この子はどう教えたらいいのだろう？」という事を考えていたら教室が終わっている。子供がどういった子なのかを知ろうとするよりも、教室に求められている事をするだけで正直必死だった。

さらにふれあい館など、他のフィールドでゼミ生が「〇〇ちゃんがこの前ねー」と話をする事があるが、全く分からない。多岐にわたる活動が生みだしてしまった情報格差も共有の場が少なすぎてカバーできなかった。

また、対話班や活字班が行っていた活動の様に、学習支援以外の時間を共に過ごす機会を自ら作る事もなかった。唯一参加できたのは、つるみ朝のツイスター企画。しかし、それもカメラ撮影を担当して、実際に子供と触れ合う時間はなかった。

しかし、そんな私に求められていた事はフィールドで感じた事を消化して、それを第三者に発信すること。こうして振り返ると、私は直接子供達とコミュニケーションを取れた時間というのは限りなく少なく、菜穂子が普段から言っているような“箱庭”状態でしかフィールドを見られていなかった。こうして事実を淡々と並べてみると、いかに私が全ての活動において受け身であったかが分かる。私はこんなに表面的なお付き合いしか出来ていなかった状態で堂々と映像作品を上映しようとしていたのだろうか。他の用事を良い訳にして抜けようと思えば抜けてしまえる環境の中、相手に興味を持ってコミュニケーションを取ろうとする事の難しさを恥ずかしながらも再確認した。

私はゼミ活動への参加の仕方を再度考え直す必要がある。現場にコミットし続ける難しさをいかに克服できるのか。そして、いかに子供達と互いを巻き込み合える環境を自らが作っていけるのか。人と向き合うも何も、「誠実さ」という軸がなければ全ては始まらないと感じた。

フレンズプロジェクトと一口に言っても恐らく個々人によって思い浮かべるものがまったく違う、それが今年度のフレンズプロジェクトではないだろうか。私自身は映像班に所属し、映像というものに向き合ったのが本年度のフレンズプロジェクトの主な活動であった。映像班では、春学期も秋学期も、作成の過程に苦しみ悩むものなかなか結果が出ないというもどかしさを味わった。しっかりと進行していくカルタやブログ、対話班のフリートークなど、他の班が結果を残している中で自分は何をやっているのだろうという悔しい思いを味わうこともあった。しかし同時に、映像を作るにあたっての生みの苦しみの中での対話、自分の中での苦しみというものが1年を振り返ってみると思っていたよりも大きなものとなっていることを実感するのである。自分と違う環境に置かれている人や物事に対し想像力を働かせることのむずかしさ自分の伝えたい思いを、映像というメディアにのせて表現することのむずかしさ、怖さ。チームメンバーとの対話の中で生まれる新しい考えや迷い。その過程すべてをきれいに最後の映像の作品に託せたかということ、そこには疑問が残る。映像の製作能力にも限界があり、果たして自分の考えのどれだけが映像を見て下さる人に伝わるような映像になっているのか、それは未だ曖昧であり自信も小さい。しかし、そのできた映像作品に対するまでの過程のもやもやこそが、映像班の大きな学びであった。

課題もある。映像班では春も秋もチームをさらに細分化して映像作成に望んだ。そのため各チームの進行状況の把握は曖昧で、同じチームなのにもかかわらずバラバラに進んでいる感は否めなかった。情報共有できる時間や方向性の統一をする必要はプロジェクトとしてあったのかもしれない。さらに根本的なところで言えば、春のチーム分けの段階で映像・活字・対話とチームを分けてしまったことは果たしてどうだったのだろうか。もちろん始めから集中してそれぞれの表現方法によるプロジェクトに望むことができたなど良かった点もたくさんあったが、話し合いやフィールドワーク、授業の学びの中でじょじょに変化していく考え方の中で自分に与えられている表現方法は映像だけといったように、本来ツールであるはずの表現方法が少々強制的なものになってそこに縛られてしまう感覚が、なくもなかった。来年の課題になってくるかもしれない。

最後の授業で1年の振り返りをした際、私が発表したのは大きな道に放り込まれたような自分の話だった。大きな広い道。分岐点はたくさんある。行き止まりもたくさんある。でもその脇にはまたほそい小道が伸び、そこを進むともっと細い道に出ることもあれば、広い道に出ることもある。だが決してその道に終わりはなくただひたすらに前に進んでいくしかない。塩原ゼミでの1年は本当にそのような道を歩いているような1年だった。

来年度も終わりのない道は、続く。

一年間塩原ゼミで **FRIENDS PROJECT** を進めてきて、けれど常にあったこの疑問について答えが出ることはなかった。つまり、「結局 **FRIENDS PROJECT** とは何だったのだろうか。」ということである。ゼミに入るまでは、外国につながる子どもたちと何か企画のようなものをしてそれを映像にまとめることが **FRIENDS PROJECT** であると思っていた。しかし今年は映像・活字・対話と最初から活動を三つの班に分かれたためなのか、なんとなく「そういえば **FP** って具体的にはどの活動の部分を目指すのか？」という疑問を曖昧にしたままに現場に関わって行ってしまった。そして、活字班でブログを書いたり対話班のフリートークを経たり、自分の所属する映像班で右往左往し悶々と悩み続ける日々を送りながらも、結局一年が終わるこの時まで来ても **FP** が何なのか、よく分からないというのが正直なところである。

中身の不透明なまま **FRIENDS PROJECT** の振り返りがなされた際、しばしば挙がっていたのが「**FP** の名づけ直し」という問題である。そこで新しいアイディアもいくつか浮かんできてはいたものの、暫定的には「**FRIENDS PROJECT (仮)**」という名前で通っているようである。そしてこの「(仮)」という文字が、塩原ゼミをよく現わしているようで私は実は好きである。ゼミでフィールドワークへ行って、いろいろな人たちと出会い、見えてくるものも確かにあったが分からなくなってしまうこともそれ以上に多かった。むしろ、自分の立ち位置を不安定にするために現場へ出ていったのだろうかときえ考えられるくらいである。そんな想いを、この「(仮)」がうまい具合に包み込んでくれているように感じる。今は見えなくてもいい、形にならないままで、未完成なままでいいのだと言ってくれているようで、迷子になってしまった私をふわふわと包み込んでくれるかのようなのである。だから私は、かっこいい名前をこの活動につけなおすよりはいいそのまま「**FRIENDS PROJECT (仮)**」というのが一番びったりな名前なのではないかと考えている。そしてまた、迷い悩みながらも活動を続けて行って、いつの間にか少しずつでも前進している自分に気づけることを目指している。

## <各班活動紹介② 活字班>

活字班は言葉を使う遊びや学びを通して、子ども達との交流を図りました。来日して日が浅い子ども達の中には、日本語や漢字に対して苦手意識を持っている子が少なくないため、私達のグループは3つの班に分かれて、それぞれかるた、すごろく、絵本作りを通じて子供達に日本語に親んでもらえる様な取り組みを行いました。以下、詳細を説明します。

### ①潮田小かるた班

潮田小学校では子ども達と共に、漢字かるた遊びを行いました。漢字かるたとは、小学校の各学年で学習する漢字を元に読み札にして、その漢字を表わす絵を子ども達に描いてもらい、それらをもとにいろはかるたの様に遊ぶゲームです。子ども達は最初は漢字を理解して絵を描くのに戸惑っていましたが、次第に積極的にかるた作りに取り組んでくれるようになり、かるた完成後の12月15日の大会では、大いにかるた取りを楽しんでもらう事ができました。また、漢字への苦手意識を取り除くことにも役立ったと思います。

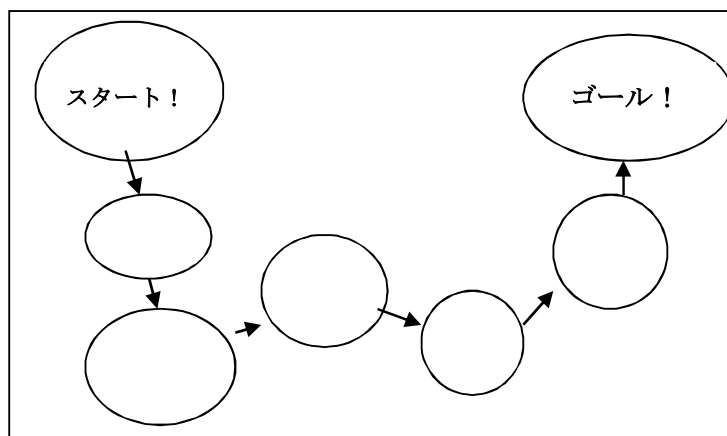


左、田、右、花の絵札

### ②ふれあい館自分すごろく班

ふれあい館では、4人の中高生と一緒に「自分すごろく」を作りました。これは、自分の今までの過去の中で思い出に残った事、忘れられない事を小さな紙に描いてもらい、すごろくのマス目の様に並べたものです。このすごろくの製作の狙いは、今までの自分を言葉で表現できるようになること、また遊びながら日本語に親んでもらえるようになる事、などでした。子ども達にはまず年表形式で自分の思い出を書き出してもらい、それからすごろくのマス目をゼミ生が作る形式をとりました。

予定では皆で遊べるような大きなものを作るつもりでしたが、製作時間が足りなくなってしまったため、B4サイズの紙を台紙として作り、子どもたち一人一人にプレゼントしました。当初の予定とは違ったものになりましたが、自分や友達の思い出がすごろくに仕上がったのを見ると、子ども達は喜んでくれました。



自分すごろく イメージ図



マス目の一例

### ③つるみ夜教室自分 HISTORY 班

鶴見夜教室では、「自分すごろく」のように今までの自分の思い出などを絵本にする「自分 HISTORY」の製作を試みました。しかし、もともと教室が開くのが隔週であるため活動時間が少なく、また受験勉強も忙しくなったため、絵本を一緒に作り上げる事は残念ながら上手く出来ませんでした。その代わりとして、鶴見夜教室では高校入試の面接対策に力を入れ、言葉で自分を表現する練習をゼミ生と一緒に何度も行いました。この教室は比較的少人数のクラスであるため、生徒一人一人に寄り添ったマンツーマンの指導ができました。

私は後期の実践として、潮田小学校の「漢字かるた作り」に参加した。当初は「ひらがなかるた」を予定していたが、2学期になり小学1年生が漢字を授業で習っている話を伺い、「漢字かるた」を作ることになった。そして、どうせ作るのだから覚えにくい漢字を優先し、絵に描きにくい抽象的な漢字は除くという方針で、ゼミ生で1年生の学習漢字80字から作る札を50字に絞った。

実際に国際教室に行き、子ども達に「かるたを作ろう」と呼び掛けてみると、乗ってくる子もいれば嫌がる子もいた。私は前期に他のフィールドに参加しており、どの子がいつ頃日本に来たのか、どれくらい日本語を話せるのかを把握していなかったため、はじめはなぜそんなに嫌がるのかが分からなかった。得意でない漢字を書くのが恥ずかしいのかと思っていると、前期から潮田小に関わる佐藤さんの「前期は全く日本語話せなかったのに、今あれだけ話しているのはすごいよ」という言葉を聞きはっとした。簡単だと思って提案した「かるた作り」も、目の前にいるこの子達にとっては大きな一歩なのだ。そして日々子ども達は成長していることを。その後もフィールドワークを重ねるごとに増えていく札の絵や文章は子どもらしい発想のものが多く、かるた大会が楽しみになった。

そして当日、前半・後半に分かれて大会を実施。最初にかるたのルールを確認するのも色々な国の子がいる国際教室ならではの光景だろう。前半の1年生のみの回では、子ども達は習ったばかりの漢字に奮闘しながらも、1回戦が終わると次は互いに札を読んだり、漢字が苦手な子は他のひらがなのかるたを始めたりと楽しんでいた。後半の2年生以上の回では、特に男の子が何回戦も繰り返すほど白熱していた。いつもは同級生や兄弟で固まっていた子ども達が一緒に、しかも本気でかるたを楽しんでいる。そのような空間がかるた大会にはあった。

実践前、私たちはかるたを通して漢字学習や、簡単な絵や文を用いて子ども達が自由に表現する機会を持てることを期待していた。しかしそれよりも、同じ国際教室に通っているが今まであまり話さなかった子ども達が仲良くなるきっかけを作れたのではないかと思う。今回生まれた交流が今後繋がるとうれしい。些細なことでも話すきっかけがあれば人と人は交わることができる、そんなことを感じた実践であった。後日、私たちは実践を振り返り、このかるたに「きっかけかるた」と名付けた。

◇潮田小学校

小学校独特の雰囲気と春学期に出会った子どものかわいらしさが忘れられなくて、秋学期には潮田小学校に通うことにした。でも就職活動とコソボ行きが重なってしまい、実際には10月と11月の四回しか学校に行けなかった。

そのうちの一回は「潮田 YY（うしおだ・わいわい）」というイベントが行われていた日で、中南米とブラジルにルーツを持つ子どもの人数の多さと教室の熱気に驚いた。他にもフィリピン、韓国、中国などの教室があったのだが、アメリカやフランスから来た子どもが少なく、日本人が一般的に持つ「外国のイメージ」とは逆の構成比をなしているのが面白かった。たいていどこの教室でも各国の食べ物が用意されており、それぞれの地域を表すのに「味」が使われているのも印象的だった。

学習支援では、主にその日に出された宿題のお手伝いをした。宿題がない日には九九の5の段とか、漢字の読み方とか、いま習っていることをプリントで演習した。一時間集中力を持たせるのは大学生の私でも難しいことで、雑談や休憩をはさみながら学習を進めた。その「合間の時間」には子どもたちは個々の好きなことをやりたがる。お絵描きが好きなSちゃんは、私の似顔絵を描いてくれた。「先生の名まえ覚えてる？」と何度かやりとりしていたので印象に残ったのか、みつあみぱつんの女の子の上には「ひろみせんせい」という文字があって、私はわが子に似顔絵を描いてもらった親のような気分を味わった。折り紙にはまっていたBは5の段以外の掛け算をやりたがらなくて、「ここまでやったら折り紙ね」と区切りをつけながらしぶしぶとプリントを進めた。結果的にはいつもより多い量の問題をこなしていたようで、ABCの方は少し驚いていた。

活字班のかるた作りは、春学期の「子どもはかるた好き」という発見から誕生した、ゲーム感覚と漢字学習と創作の楽しさを絡めた取り組みだった。最初は、活字班が自らの存在意義のために創り出したアイデアのような気がしていて、子どもの学習の時間をかるた作りで割いてもらうのが悪いような気がしていた。「活字を使う」という枠が最初にあって現場がそこに当てはめられることへの抵抗感や、無理に何かを形にする必要があるのかという疑問が心の片隅にあった。一方で、大学生として少しでも子どものためにできることとしては、シンプルでわかりやすいアイデアだとも思った。

結果的にはかるた大会は大成功だったようだ。私は本番に行けなかったので参加者から様子を聞いたのだが、やはりYの「もっかい！」という言葉に全ては集約されているのかもしれない。私もかるたを作る過程で、時間を気にしないくらい熱中する子どもの様子を見て、それだけでもすごく救われた気がした。そして、「足はくさい」「花はかれる」といった素直な子どもの感性に何度も笑わされた。

小学生を対象としたこうした試みは、こちら側がしかけるという要素がどうしても大きくなってくなり、子どもが主体的に活動するのはなかなか難しい。でも、何か成果があったと

すると、子どもにと学びが始まる場に「楽しさ」という要素を持ちこめたことだと言えるのかもしれない。

チーム：活字班      氏名：新毛 聡一郎

この文章をもって、私たちが一年間取り組んできた **FRIENDS PROJECT**(仮)を振りかえるわけだが、せつかなのでポジティブな面を出していきたいと思う。

私は春学期、2つの場所のフィールドワークに2回ずつ参加した。それは、最低3回行けばいいかな、という半ば義務感から生じたものだった。そのため、FW先では毎週きちんと参加しているゼミ生やスタッフの方々に負い目のようなものを感じていた。

そのため秋学期はなるべく多く参加してみようと、FW先を潮田小学校にして学習サポートを行った。初めは「対話」というものがよく分からず、一種のためらいを感じていた（今考えると、一方通行のコミュニケーションでさえない「行き止まり」のコミュニケーションであった）。

だが不甲斐ないことにこの状況を打ち破ってくれたのは子どもたちの方であった。彼女たちの笑顔に癒され、来週も頑張ろう、楽しんでもらえるように、と思うようになり、そこには純粋に毎週のこの時間を楽しんでいる自分がいた。そして「あの先生、先週教えてくれたんだよ」と友達に話す女の子から気づかされた、「時間をかけること」「再訪の大切さ」改めてお礼を言いたいです。

その一方で大学生として学習サポートにおける関わりに少なからず限界も感じている。スタッフの方に「皆さんは今週で最後ですよ」と尋ねられ「今までありがとうございました」で終わってしまうことに、これでいいのかと違和感も覚えていることは否定できない。

しかしながら（逆説ばかりだが）この一年間多くの方々と関わりをもったことで、深く物事を考えるきっかけができたし、考え方そのものを変えることができたと思っている。次の一年間、ものすごく小さなことかもしれないが、この変わった自分が自発的に何か変えていけるかもしれない、とあえて自分にタスクを課しておく。



チーム：活字班

氏名：浅野理衣

後期のフィールドワークは就職活動と重なって、15日の文化プログラムしか参加できなかったため、フィールドワークの準備中に考えたことを書きたいと思う。

私が後期、話し合いに参加している際に感じたことはそもそものコンセプトの不明確性だ。私は活字班の潮田洋学校のグループでかるたづくり・大会に向けての話し合いに参加していたのだが、それはなんとなく、といった理由がいちばん適切だった。

前期に決めた活字班、という枠をあくまで出ることなくその中でやれることをリストアップし、さらにそこから潮田小学校に来る生徒の年齢層やキャラクターを考えて絞り込んだ結果私達の活動が決定したのだ。

「子供たちの居場所づくりに貢献したい」「子供たちに漢字を学んでほしい」という目的はもちろんあり、結果的にかかるたづくりおよびかるた大会を楽しんでもらいフィールドワークは成功であったと思う。

しかしながらある意味で最も主体的であるべき私たちが受け身であったように感じるのが問題点である。

ほとんど参加できなかった私がこのような意見を言うのもためられるが、前期で感じたことからもう一度自分がなにをFPを通じて感じたいのか、発信したいのかを改めて考え、グループを再編することをもよおしたように感じる。またこのプロジェクト自体の場もあらかじめ提供されていたが、このプロジェクトに参加する生徒を自ら集めることをしてもよかったのかもしれない。

一年を通じてこのフィールドワークに対する違和感や疑問を挙げるゼミ生が非常に多かったように感じるが、このように最初の土台づくりから関わっていればこのようなことは防げたのかもしれない。

本年度はフィールドワークの数を多くこなせたわけでは無いが、本年度では **FW** と机での勉強どちらにおいても「気にすべきところ」と「気にすべきではない事」の線引きをし直し続ける事、またその必要性に気づかされた。現段階において日本社会でのしっかりとした足場を持ってない外国にルーツをもつ「彼ら」は、我々マジョリティの「我々日本人」とは境遇・立ち位置・足場など様々な面で異なる存在なのは事実である。しかしその現状を踏まえた上で、それでもなお「我々」と「彼ら」と二分された関係を修正し新しい関係を構築するという事は、非常に困難で正解が見えない作業であったと思う。「我々」とは違うというアイデンティティを損なわず、上手く双方のギャップと付き合っていくための答えは未だ見つかっていない。しかし **FRIENDS** プロジェクトの最も有意義な点は、そのような事実に気づき「なんとかしたい！」とモヤモヤとでも感じ取る、という意外に意識しなければとどり着けないステージに立つ事を促し、そしてそのモヤモヤは「彼ら」と対面する事で、リアルな感覚を伴うという事だろう。社会的な不満を持たず、今の立ち位置に満足し安住している自分にとって、社会によって傷つけられている人々の痛みを含めて自分ゴト化する事、それ以前に彼らが何に傷つき不満を持つか知る事すらも簡単ではないし、事実出来ているとも思わない。しかし傷つけるものを知りたい、その痛みを引き受けたい、もしくは自らが知らず知らずのうちに傷つけている構図を変えたい、という気持ちを持つようになった点で **FRIENDS** プロジェクトは大きな意味がある。**FRIENDS** はその中で何かを達成する事よりも、考える場を提供するという事が一義であると感じる。

しかし普段このような事を思いつつも、実際にフィールドに立つと、このような問題意識はどこか隅の方に追いやられ、気づけば単純にコミュニケーションをとる事自体や、相手に対する新しい側面を知れる事を楽しんでいる自分に気づく。頭で考えると難しい問題でも、一緒に楽しめる場があれば比較的簡単に達成できるのかもしれない。ただその楽しむための場が一般的には無いという事実もある。このような認識から、やはり今後の活動では外部に対して発信し、その場を形成していく事が非常に重要であると思う。

こうやって文章化すると、当たり前のことしか羅列していないように思うが、やはりこのような当たり前のことを「リアル」に感じられた事が最も大きな収穫だろう。

私が所属する活字班・ふれあい館チームでは、昨年の実践の「自分 MAP」を応用して、「自分人生すごろく」作りを行った。この企画は、ゼミ生と子ども達の人生の中での思い出や出来事などをすごろくのマス目に見立てて書き出し、「誕生」というスタートから「未来」というゴールまで繋げて行くというものである。この企画を選んだのには、主に2つの目的が有る。第一に「自分はどのような人生を送ってきたか」という事を文章にして表現してもらおう事で、自分を紹介したり表現する事に慣れ親しんでもらおうという点である。「面接対策」とまではいかないが高校に進学する前に今までの自分を振り返る事で、これからの学校生活や将来の事について考える・想像するヒントの一つになってくれれば、との期待を込めた。また自分の事を表現するだけでなく他の参加者のマス目に止まった時にその人の思い出を読む事で、その人の事についてよりよく知ってもらおうという思いもある。第二に「活字班」という名の示す通り、言葉・文章から何かを作り出す事の楽しさを味わってもらおうという目的である。去年の自分マップはイラストが中心だったので、今年は文章を出来るだけ書いてもらうという事を意識した。

残念ながら活動の時間が足りなくなり、マス目の元になる自分年表は完成したものの実際のすごろくを皆で作るという所までは出来なかった（先輩方がこれからすごろくを作り、子ども達にプレゼントする予定）。しかし年表を作るための会話では、母国の学校の行事やクラブ活動の事について子ども達は生き活きと語ってくれて、常に笑いが絶えなかった。その中で個人的に印象に残った事は、フィリピン出身の子ども達3人のうち2人は日本で誕生、または幼少期を過ごした経験があるという事である。日本から外国へ、外国から日本へという一方向の移動ではなく、日本と外国を往復する様なトランスナショナルな移動は課題図書の中でしか知ることが出来ていなかったが、彼らが日本とフィリピンとの「往復」を経験していた事を知る事で、「往復できる距離にある」という形でフィリピンの存在が私の意識の中で近づいた。「国と国との境は、思っているよりも高い壁ではないのかもしれない」という感覚が、この実践を通じて学んだものであると現時点では感じる。

ただ去年の「自分 MAP」の企画に簡単に乗っかって、「自分の過去を振り返る」という事はどういうことかについて真剣に考える事を疎かにしたという反省や、子ども達への説明が不十分だったという反省も一方では感じている。本年度の実践を今後しっかり振り返り、来年の活動に繋げていくことをこれからは意識したい。

活字班すごろく作りチームの一員として、約2カ月間活動に携わってきた。私は主にフィリピンから来日したRとペアを組み、最初の2時間は彼女の学校の勉強を手伝い、あとの1~2時間はすごろくのマスとなる「今までの人生のなかで印象に残った出来事」をシートに記入する作業を一緒に行うという形で活動してきた。

すごろくがどういうものかわかってもらうために最初に人生ゲームで遊んだ。Rはゲームそのものには興味を示し、「どんなものか、一回一緒にやってみようか」と声をかけると楽しそうに参加していた。しかしいざシートに記入しようという段になると、来日してからのことはよく話しても、フィリピンにいた幼い頃の出来事を訪ねると「わかんない」「忘れた」を繰り返す。シートに記入する作業にも、なかなか着手しようとしなない。その横で、同じくフィリピンから来日した別の女の子は着々とシートを埋めていく。Rはしばらく彼女にちょっかいを出したりしていた。しかしその女の子が、私たち大学生と話しながらフィリピンでの出来事を思い出していく様子を見るうちに、Rも少しずつ自分が幼かったころの話をし出した。フィリピンでの変わったエピソードに私たちが「面白い!」と大笑いしたり、ミスコンテストに出場した話に「すごーい!」と反応したりすると、Rは照れ笑いをしながら、少しずつシートに記入し始めた。その様子を見ながら、私は、彼女がはじめ自分の幼かったころの話をしたがらなかつたのは、本当にフィリピンでの記憶をなくしていたわけではなく、私たちがどんな反応を示すのか不安に思っていたのではないかと感じていた。もしかすると彼女は、私たち大学生の前では「フィリピンにいたころの自分」を断絶しようとしていたのかもしれない。しかし彼女がフィリピンで経験した出来事を私たちが肯定することは、「フィリピンにいた頃のR」と地続きになっている現在の彼女自身を肯定する事にもなる。そういった出来事を、時間をかけて文字に起こすことは、R自身がゆっくりと自身の記憶をたどっていく作業として良かったのではないかと思っている。

しかし、多くのゼミ生から意見があったように、「去り際」については考えるべき課題があると思う。私は最後の活動日にRと会えず、彼女にきちんと挨拶が出来なかった。せめてと思い、Rたちが書いたシートをもとにマスを作り、すごろくを完成させて彼女たちにプレゼントするつもりである。その裏には私たち全員のメッセージを添える。彼女たちはA4のシートをほとんど全部埋めてくれたのである。それを目に見える形で完成させ贈りたいと思う。本来ならば、完成させるところまで一緒に作業するつもりだったのだが、活動がなかなか思うように進まず、このような形になってしまった。FPは今後も続くとはいえ、すごろく作りはひと段落なのだから、けじめとして完成したすごろくを見た彼女たちの反応を見届けることが筋ではないかと、今は考えている。

今回のフレンズプロジェクトに関しては、なかなか満足いく活動をしきれなかったなどというのが正直な思いである。最後のサブゼミでも話が出てきたが、理想は「彼らのやりたいこと」のサポートを私たちが行う、という形だったのではないだろうか。私の所属していた「自分すごろく」班は、対象のほとんどが時間のない受験生であり、企画の骨子も大学生側で行ってしまったという点で、なかなかその（仮の）理想像には近づけなかったように思う。

しかしそもそも、「やりたいこと」というのは中学生や高校生が誰でも持っているものだろうか。普段の生活からはそれがなかなか浮かび上がってこない子どもも多いだろうし、あったとしても「やりたい」と言える状況にあるのかという問題もある。私も、もし今自分のやりたいことを問われたら即座に答えられる自信がない。一緒にいる人、場所によっても変化するだろう。となると、今回私たちの行った活動を、今後の「やりたいことの実現」につながる第一歩目と位置づける可能性が生まれてくるのではないか。

つまり、去年は同じ中学三年の受験生を中心としたメンバーと、「自分マップ」作成の活動を行った。そこで私たち大学生とふれあい館に集まる子どもたちは関係を持ち、そこから「こんなことならできそうだ」という展望を見出せ、今年度の文化プログラムの活動につながった。実際は「できそう」と思われたことが上手くいかなかったりと困難や課題も多かったが、それでも昨年度の活動が第一歩目となっていたことは間違いない。

今年も中学三年生は、自分の今までの人生で起こった出来事や、様々な夢を語ってくれた。その中には「え、こんなことが得意だったの？」というような、驚きの発見も少なくなかった。ここで少しでも生まれた子どもたちとのつながりの中から、来年の活動を構築していければそんなに素敵なことはないんじゃないかと、漠然と思っている。

今年度の **FRIENDS** プロジェクトは、昨年度のものとは私にとって大きく違った感触を与えた。フィールドワークの場所・内容自体は、ふれあい館の中学生と自分の人生などを振り返って考えよう——高校受験の面接対策という陰ながらの意味もあるが——という、昨年度から連続したものだ。従って、ふれあい館にはしばらく期間が空いてしまったとはいえ何となしに馴染みがあったし、自分自身が去年と比べればリラックスした気持ちで現場に臨めたと思う。

昨年度はもっと重苦しい気持ちだったことを思い出す。去年のちょうど同じ時期に私が感じていたプロジェクトに対する思いは、果たして私は彼らに何をできたのだろうかという葛藤が大きかった。というのも、「自分MAP作り」は一応無事に終わりを迎えられたが、中学生側がどう思っているか、彼らが何を得られたのか、私自身には確信が持てなかったためだ。ある時期ゼミ内でも問題になったように、一過性の関係を「友達」と呼ぶことの違和感や、自分MAP作りをやって何の意味があるのか？という思いを抱えて、ぐるぐるしていたと思う。

その気持ちが、不思議なことであるが、今年度はそれほど起こらなかった。それが4年生という計画の中心から少し遠くなったことのせいであるのか、それともふれあい館に慣れたせいであるのかは私自身にもよくわからない。ぼんやりと自分で感じた違いは、昨年よりもフィールドワークにおいて、対等な関係性をあまり気にしていないということだ。そういうつもりはなかったのだが、3年生の時は私自身だいぶ気張っていたようで(単に人見知りなだけかもしれないが)、何かを与える—与えられる、ギブ&テイクの関係性にすごくこだわっていたと思う。もちろんそうした対等な関係性は、実践活動をするうえで注意しなければいけないものではある。しかし、もっと長期スパンで考えることが必要なのではないだろうか。どちらが得をしてどちらが損をしたかという考え方は、長い目で見てみないとわからない。それよりも、まず関わること、それ自体が必要だと、2年越しにふれあい館に関わって感じた。

今年は自分自身の都合でプロジェクトに最後まで関われなかったのだが、それでもものんびり関係を作っていこうと思えること、それが **FRIENDS** プロジェクトの成果なのではないだろうか。記録の完成を見た後、もう一度彼らと関わっていきたい。

チーム：活字班 鶴見夜自分HISTORYチーム 氏名：蜂屋絵美里

FRIENDS PROJECT (以下 FP) 2010 を通じて感じたこと、それは、白紙の難しさであった。

塩原ゼミの4年生として、私個人としてのFPへの参加は2年目であった。それゆえに今回FP2010で出会ってきた経験には、常に昨年度の反省から来る恐れがついて回っていた。昨年度は、三客班という班で事実を客観的に映像化し、第三者に伝えていくという役割を担っていたが、「客観」という言葉に翻弄されるがあまり、「実践」から距離をおいてしまう本末転倒なジレンマに陥ってしまっていた。そこで、今年度の個人的な目標としては、結果を求めるよりもまず、子どもたちと話したい、子どもたちにも自分と話すことを楽しいと思ってもらいたい、その気持ちに基づいて教室に通ったのである。

そんな気持ちの新しい出発点を求めて、FP2010では私は、4月に創設されたばかりの新教室、鶴見夜教室に主に足を運ぶようになった。春学期は、ただ教室のみんなと勉強し、学校の様子や家での過ごし方などを雑談していると、その時間は、普段、大学の友達と接している時のように純粋に楽しく、そこにはっきりとした自己と他者の対話の意識は芽生えなかった。しかし、秋学期になって、いざFPの実践として「自分 HISTORY」の企画を持ち込むと、去年とは全く逆の壁にぶつかるどころか挟まれた。ひとつの壁は、せつかく人として仲よくなれた関係を、プロジェクトという枠組みの中に落とし込み、発表していくことに強い違和感を覚えてしまったこと、もうひとつの壁は、去年の「客観」のような先入観を以て臨みたくないという恐れあまりに、あまりにオープンな企画にしてしまい、なかなか企画が進まなかったという壁である。もともと4月に創設されたばかりの教室であったため、教室自体の子どもたちへの強制力が低く、「何時に来て欲しい」と伝えても時間通りにはひとりも集まらないという問題点もあった。加えて、ただ白紙の画用紙が連なっている絵本を持ち寄り、一緒に「何か」を創ろう！と自由度の高過ぎる提案をしてしまったことは、子どもたちの戸惑いを生むだけの結果になってしまった。そこで、秋学期途中からは、高校受験を控えた中学三年生のみんなの面接対策として、マンツーマンに近い形で子どもたちの話をじっくり聞き、何度も何度も裏紙に子どもたちの長所や短所、思い出を一緒にメモにする時間に転向した。最終的には、それを私が家で白紙の絵本にまとめて移し替え、未来への質問を織り込んで、自分で埋められるようにしてプレゼントするという押し付けがましい結果になってしまったが、その過程の中で、「〇〇くんがあんなにしゃべるようになるなんてねえ」「すごい！ 師匠と呼ばせてください！」とかけてもらえた声は、私の中で掛け替えのない白紙の上の「実線」だった。白紙のような教室で始まった白紙企画の実践ではあったが、その困難を越えて、少しでも子どもたちの心に、子どもたちがこれから豊かに塗り絵をしていけるような線が描けているのであれば、それは私にとって何よりも最高の結果である。

そして、そんなFPだからこそ、FPで得た経験は私の中でずっと続いていくのだと思う。だからこそ、次年度にかける言葉は、「頑張る」ではなく……。

これからも頑張ろう！

「変革する“S”～サービスから相互理解へ～」

FRIENDS PROJECTも2年目を迎え、ますますスピード感を持って目まぐるしく活動するようになった様に思う。興味深い企画案が次々に出され、フィールドは拡張され、関わる人数は2倍3倍に膨らんでいった。そうした中で私自身は、自らの参加の仕方について考えさせられ続けた1年間であったと感じている。

昨年度は“三客班”としてフィールドに居るのか居ないのか、不安定な足場ながらも足繁く通っていた。しかしいつまで経っても、私は水を差し続ける存在でしかなく、ゲンバの空気や土に馴染むことは出来ていなかったことは認めざるを得ない。とはいっても、ある程度の成果を形にするという作業が、そうした疎外感を紛らわせてくれた。

“活字の力チーム”として活動した本年度は、よくも悪くも計画通りには行かなかったといえる。様々な特徴を持つフィールドに併せて企画をカスタマイズしていく段階までは好かったが、実際に私が赴いたフィールドでそれらを実行する機会には恵まれなかったからだ。

それでもこの実践は、卒業を目前にして私に大きな気付きを与えたと断言出来る。私は主に受験を控えた生徒の面接対策支援に参加したのだが、普段の学習支援とは全く異なる手応えを感じたのだ。とにかく、生徒がしゃべる、しゃべる……しかし日本語によるコミュニケーションに自信の無い彼/彼女にとっては、これが対策の一環でもあったし、私にとっては心地よかった。対話を阻害される要因が存在しない場で、なおかつ企画案を進行しようという一方的な欲が働かなかったことが、私の“余所者感覚”を見事に取り払ってくれたのだ。

昨年度の実践を振り返ると、私のそれはどこかよそよそしい気遣いで武装した「サービス」だったように思う。どうすれば生徒たちの主体性を引き出し、楽しく参加してもらえるか。今にして思えば、言葉巧みにこちら側に引き込もうとする売り込み営業のような振る舞いだった。

一方で今年度の実践では、多くのゼミ生がフィールドにおいて個別具体的な繋がりを得てきているように感じられる。そしてそれらの価値を吟味するチャンスにも数多く巡り合えたのではないか。フィールドに対して及び腰だった私も、生徒の語りに耳を傾けた瞬間、その大切さが身に染みた。

次に会ったら、どんな顔をしているだろう。どんな話をして、どんな一面を知っていけるのだろう。迎え入れてくれる存在、そこに「相互理解」への期待や希望があるから続けられる、勇気が出る。時間を味方につけた瞬間、その“S”は変革するのである。



昨年と何が違ったか——。それは子供達とより個人的な話が出来たことだ。これはあくまで私個人の変化であり、またそれが「対話」であったかはわからない。

私は活字班に所属し、鶴見夜教室で活動を行ってきた。昨年のF Pの反省で私は、カメラを回すことばかりに集中してしまい子供達と接することができず、プロジェクトに主体的に関わることができなかったことを挙げた。そこで今年度の活動では、自分個人の目標として子供達と対話することに重点を置こうと決めた。活字班の活動では中学生の子供達と宿題をしたり小テストの勉強を通して、最近ハマっている事や関心のあること、学校での出来事や先生に対する愚痴などを話すことができた。しかし土曜日の教室に参加する回数が少なく、一度会ったきりになってしまった子供がいたのも事実だ。

昨年の反省にも挙がっていたように、継続的に教室に通い、子供達と接する機会を多く持つことがまず前提にあると感じる。それができなければ、子供達との対話などそもそも難しい。そして私がそれを今年度達成したかと聞かれればそれもまた難しかったと答えざるを得ない。つまり、私が行った活動はただの先生と生徒の関係を一定期間築いただけであり、決して子供達が私を信頼し、心を開いてくれたなどという事はできなかったと思う。ただ教室に足を運ぶだけではなく、自分の生活を子供達に懸命に寄せていく姿勢を作らなければその場に本当の意味で関わっていくことなどできず、対話などできないのだと今年度も実感しているところである。継続性という点で今年も反省を活かせなかった。

しかし子供達と関わった時間は私にとって貴重なものであった事に変わりはない。私との出会いが子供達にどんな変化をもたらしたかはわからないが、ゼミとしての出会い、関わるきっかけを作ったことは双方に大きく影響していると思う。この出逢いのきっかけこそ、プロジェクトの根底にある、プロジェクトを行う意義なのではないかと思っている。しかし出逢いを対話、友情、信頼へと繋げるには時間が必要であり、それは個人の関わりの深さに比例して構築されていく。ゼミ生の中には3年生の中にもそのような関係を築いていた人がいたと思う。

もうひとつだけ反省点を言うと、初めに行った活字班のプレゼンで、ゼミ生内だけでもSNSを利用してどのような活動を行ったか分かち合いを試みたいと発表した。実際にはなかなかそのような分かち合いが実現できなかった。来年度の活動では他のフィールド先で何をやっているのかももう少し知ることができれば、(例えば映像班がどのような映像を目指し、どんな映像を撮っているか知りたかった)バラバラに活動していても一つのプロジェクトをやっているという意識を高めることができたかもしれない。

私は二年間を通して、F Pが「出逢い」を多く生み出している所に意義を感じている。それは子供達との出逢いであり、施設の方々、そして対話班の行った対話の場による出逢いである。このF Pがこれからも関わる人全てに様々な「出逢い」を作っていくものになればと思う。

## <各班活動紹介③対話班>

対話班では、様々な分野で活躍するゲストの人々を招いてお話を聞きながら。

塩原研究会の中心理念である「多文化共生」を改めて問い直す、

『対話班フリートーク』というワークショップを計4回開催しました。

ワークショップの舞台となったのは、慶應義塾大学三田キャンパス近辺にある

『三田の家』というコミュニティスペースです。

古い民家を利用して作られた三田の家は大学関係者のみならず、

アート、ビジネスなど様々な分野で活躍する人々が訪れます。

第一回（10/26）ゲスト：慶應義塾大学通信教育生の皆様

「そもそも多文化共生って何？」という素朴な問題意識をもとに、ナショナリズムやコミュニティについて議論を行い、最後には各グループに分かれて理想的な多文化共生の姿について一文でまとめ、発表しあいました。

第二回(11/2)ゲスト 金子茉莉乃さん（上智大学4年 国際教育学専攻）

金子さんのご実家は、50カ国以上の国の留学生をホストファミリーとして受け入れてきました。その様な環境で育った金子さんの、留学生との交流の体験談を通して、異文化コミュニケーションのあり方について語り合いました。

第三回（11/30）ゲスト 外国人学校ドキュメンタリー上映会連絡協議会（外ド連）

外ド連さんは、外国人学校を題材としたドキュメンタリー映像の上映や制作を通して、外国人学校への理解を深める活動を行っていらっしゃいます。メディアとしての映像の持つ力と、その危うさについて様々な角度から議論を行いました。

第四回（12/14）ゲスト 森山誉恵さん（慶應義塾大学4年 学生団体3keys代表）

森山さんは、児童養護施設で生活する子ども達に勉強を教える学習ボランティアの活動をしています。塩原ゼミの活動とも共通する学習サポートの意義や、ボランティアにおいて大切な事についてじっくりと語りあいました。

チーム：対話班 氏名：細田 瑞穂

2010年のFRIENDS PROJECTにおいて対話班は、三田の家に集まり、時にはゲストスピーカーを招きながら、その名の通り「対話」を行った。その中でも私が最も印象に残ったのは、外国人学校ドキュメンタリー上映会連絡協議会の方が来て下さった回と、児童養護施設の支援をしている方が来てお話をして下さいした回である。

外国人学校ドキュメンタリー上映会連絡協議会の方は、民族学校を教育基本法的一条校と同じ扱いをして欲しいと主張していた。それまで民族学校について知る機会もなければ知らずともしていなかった私は、当初「国の補助金は欲しいが国に指図はされたくない」というようなその主張（※あくまで私の解釈だが）をやや批判的に聞いていた。しかし、民族学校の実態や実際に朝鮮人学校の卒業生の方のお話を聞くうちに、どこか冷めて聞いていた自分が、いつのまにか懸命に解決策を探していた。それを世間は「同情」と呼ぶのかもしれない。しかし、相手の置かれている立場を想像でき、痛みを感じることができたとき、数十分前の自分とは違った自分になった気がした。あれから、インターネット上で朝鮮学校に対する批判も見た。朝鮮学校に関する異なった（そして学校側には都合の悪い）見解もされていたが、当事者と接したからには、その批判に流されることなく、「自分の目で見て、自分の心で感じたこと」を大切にしたいと思った。

児童養護施設の支援をしている3keysの代表がいらした回は、非常に考えさせられる回でもあった。この児童養護施設にボランティアの教師を派遣する事業を行っている3keysの代表は、なんと私と同じ慶応大学の4年生だという。同級生にも関わらず色々なことにチャレンジしている姿にとっても刺激を受けた。また「児童養護施設に暮らす子ども達」という、それまで考えたことのなかった人達の抱える痛みについて、想像力を巡らせて考えることができた。

昨年度のFPや他班の実践と比べて今年度の対話班の実践は、何か事の起きているフィールドに出かけていくものではなかったという点で非常に個性的なものになった。しかしそれは引け目を感じるのではなく、むしろ「フィールドを自分達で創った」とも言えるのではないだろうか。対話班の一員にも関わらず、受け身的な関わり方しかできなかったことは後悔が残るとともにメンバーにも申し訳なかったが、個人的には「対話を通じて相手の感じている痛みを想像し、ジブンゴトのように考える」ということは、卒業論文の軸にしたほど印象的な出来事だった。

また回を重ねるごとに様々なバックグラウンドを持った人たちが三田の家を訪れ対話に参加してくれたことも、非常に印象的だった。これから三田の家も対話班の実践も、さらに大きく発展していく可能性を感じた。

対話班を通じて「思わぬ出会い」をしたこと、これは私の人生においても大きな出来事である。この「出会い」を大切にするとともに、これからも多くの人と出会っていきたい。

チーム： 対話班      氏名： 飯塚美樹

〈三田の家フリートーク〉 「そもそも多文化共生って何？」というテーマのもと様々なゲストを招き、ゼミ内だけでは得られない視点や多文化共生を改めて考える機会、今後にもつながるネットワークの広がりなどが得ることができ、ゼミにとっても大変プラスになったのではないかと、思う。例えば、外ド連さんの回では、子供たちの「居場所」について考えるきっかけになった。つるみ朝とも関連して、学習サポートでとても明るい印象である子ども、学校では日本人から孤立して元気がないかもしれないということも考えるようになった。チャンスがあるのなら、ある子供と一つの場所でのみ接するのではなく、学校と学習サポートなど複数の場で接することができれば、と考えた。子供たち一人ひとり、「居場所」は異なる。学校かもしれないし、学習サポートの場、あるいは家かもしれない。学校は、外国人学校かもしれないし、日本人と同じ普通の学校かもしれない。これは、私たちが外から決められる問題ではない。外国につながる子供たちに関する課題を的確にとらえるには、子供たちの一面だけと接するのではなく、色々な顔に触れるべきと感じた。

チーム：対話班      氏名：大川史織

対話班として、今年度は自分たちの活動を開かれた場所で議論するという目的の下、新たな対話空間である三田の家を拠点に、全4回にわたるフリートークを企画した。「そもそも多文化共生って何？」と、原点を問い直す試みを、ゼミ生だけでなく外部からのゲストを交えて行うことで、広い観点から対話を深めていく機会を築くことができた。3回のトークゲストには、ゲストのフィールドである自宅／船上、外国人学校、児童養護施設における多文化共生について話をしてもらった。それぞれのフィールドによって異なる多文化共生の在り方や、個人によって異なる多文化共生の定義など、毎回のトークに発見が多く有意義な時間を共有できた。参加者は入ゼミを考えている2年生、通信過程の学生、卒業生から、ブログの告知文を見て訪れた高校生、社会人など様々で、リピーター率も高く、回を重ねるごとに参加者は増えていった。大学という守れた場所で活動していた昨年度とは異なり、今年度は少なからずキャンパスから出て、ゼミ生以外の人と対話の場を築くことができたという点においても、小さな一歩であるが、大きな前進であったと思う。

今回のプロジェクトにあたり、私たち対話班は「そもそも多文化共生とは何なのか」という事を考え直す場を設けたいと考えた。そのために、様々な視点から多文化共生を考えるゲストをお招きし、ディスカッションを混ぜながら考えを深める事を試みた。

ゲストをお招きすると簡単に言ったのはいいものの、そもそも誰をゲストとしてお招きするのかという点で頭を悩ませた。しかし、調べてみると私たちと同じような活動を行い、多文化共生について考えている人は身近に大勢いることを実感した。

また、「あなたにとっての多文化共生」という広大なトピックをゲストにいきなり投げかけ、果たしてディスカッションが生まれるのかという点でも、当初不安に感じていた。しかし、私の不安など全く必要もないほどディスカッションは毎回ヒートアップしていた。「私の考える多文化共生」ということで正解や不正解などは絶対に無く、それぞれの考えを話せる場であったからこそ、一人ひとりが熱意を持って自分の考えを相手に伝えようとしていたのだと思う。

対話班として活動を進めていった際に、三田の家に入りきらないほど大勢の方がフリートークに参加してくださったことがとても嬉しかった。中でも外ド連の方で、スピーカーとして足を運んでくださった方が次の週には聞く側となって参加くださり、多文化共生というテーマだけでなく私たち塩原ゼミに興味を持っていただけたことが何より嬉しかった。中でも、私は外ド連の方が大勢の日本人を前に、「日本人が嫌いだった」と話していたことがとても印象的だった。しかし、そのような言いにくい話をできるような環境（雰囲気）を私たちが作れたことに、私は嬉しく思う。どんなときであれ、相手の立場をわかろうとする姿勢が、相手の心を開く第一歩なのではないかとその時感じた。

一つ反省としてあげたいことは、フリートークを通して感じたことや疑問に思ったことを振り返る機会をつくれなかったことである。ゲストから聞いた話を他人の言葉として受け入れるのではなく、しっかり自分自身に落とし込んで考える必要があったと思う。来年、また同じような形でゲストをお招きする際には、その後お話を聞いたうえでのフィードバックをできる場を設けたいと考えている。

【多文化共生という綺麗な言葉がポジショナリティの差を見えにくくしてしまう！】

自分はあまりフィールドワークに参加することができなかったのだが、そのような少ない経験ながらも自分が一番強く感じたことは【多文化共生という綺麗な言葉がポジショナリティの差を見えにくくしてしまう！】ということである。

「多文化共生したい！」というざっくりとした気持ちで行ってきたゼミ活動。しかし自分は「多文化共生しましょう、あなたを尊重しますよ。」という便利で都合の良い言葉で片付けてしまっただけで、しっかり相手と向き合っていなかったと一年目の終盤を迎えてやっと気付かされた。

対話班で行ったフリートーク。初回では、ゼミ生を始め二年生や通信で学ぶ方々でそれぞれが「理想の多文化共生とは何か」を真剣に話し合い、それぞれが素晴らしい答えを出した。しかしその時の自分はまだ「多文化共生」という綺麗な言葉に満足しただけだった。自分達が『多文化共生とは何か』ということを実際に考えることのできる特別なポジションにいるということに気付いていなかったのである。勿論多文化共生について考えることは大事だが、そのことについて真剣に考える余裕のないポジションにいる人のことを考えずにそれは語れない。

ふれあい館での学習サポート、その後にみんなで作成する自分すごろく。受験やテストを控える中学生に勉強を教え、その後は自分の人生すごろくを作ることで過去を振り返り、未来を考える。FRIENDS PROJECT という名のもとに、友達という対等な関係でいるつもりだった。しかし心のどこかでは慶応生が教えているという上からの視点を持っていただろうし、みんなですごろくを作りながらも自分では自分の就活のことを考えていたと思う。多文化共生という言葉でポジショナリティの差を隠し、意図的に見ないようにしていただけだったと気付いた。

一年を通して、聞こえが良くとっつきやすい言葉で相手を片付けてはしっかりとした対話ができないと強く感じた。これからはポジショナリティの差などの相手との違いとしっかり向き合っていきたい。

チーム：対話      氏名：徳島えりか

まず、フィールドワークでは春学期は鶴見総合高校、秋学期は鶴見区民活動センターでの学習サポートに参加しました。特に鶴見総合高校は、初めて子ども達が実際に過ごしている学校の中に入ることができたので新鮮でした。子ども達がみんなで示し合わせて学習サポートに参加しないようになっていたりなど、先生方から直接悩みを伺うことができたのも良かったです。私が接した子ども達は学校や勉強に対し主体的で、日々楽しんでいる印象でした。しかし、学校という場であり、子ども達は大学受験や試験を控えているため、学習以外の話をあまりすることができず、“教える—教えられる”という構造ができてしまいました。また、教えるという点でも、日本語についての質問で上手く答えられないこともあり、“教えること”についても少し勉強したいと感じました。

対話班のフリートークでは「顔の見える世界地図を描く」という第二回ゲストの金子さんの言葉にはっとしました。多文化共生のために何ができるのか、と考える中で、金子さんのアプローチは一つの答えだと強く感じました。フリートークのきっかけとなった「多文化共生」ってそもそもなんだろうという問題意識は、私自身強く感じていたもので、秋学期を通してしっかり考えることができました。ゼミ全体でも話してみたかったです。

チーム： 対話班      氏名： 飯塚美樹

<つるみ朝>つるみ朝では、幸運なことに、最初から最後まで同じ子を担当することができた。というのも、フィールドワークにあたって個人的に「継続性」を大事にしたいと考えていたので、同じ子を毎回担当できたことはラッキーだった。彼は中国から来た小学5年生で、元気いっぱいでもなかなか集中してくれず、鉛筆を持たせるのが大変だったり、他のボランティアの方にも「大変だね」と言われたりもしたが、毎回私よりも先に来て「先生、今日は何やる？」と言ってくれるような真面目な子だった。印象的だったことは、彼が「日本人が中国語を使うのは嫌い！」と敏感に反応したことだ。短絡的な考え方をすると、幼くして中国から日本に来たので、中国語を話せる日本人がいると安心するのでは、と思いがちである。だが、彼と毎回接して、決してそうではないことがわかった。なぜ嫌いなのか、直接聞くことができなかつたので実際にはわからない。しかし、私には、まだ小さい彼がこれから日本で生きていく覚悟を既に持っているような気がした。変な気遣いはいらない、甘えさせないで、と言っているような気がしたのだ。日本語を積極的に話し、勉強にも意欲的であるし、勉強の合間に話しているうちに、親に心配かけてはいけないと無意識的に彼が考えているようにも感じた。子供たちに実際に接することがなかつた時は、彼らに日本語だけを押し付けてはいけない、彼らの文化や言語も尊重しなければならない、と考えていた。もちろん、そうすべき子供たちもいると思う。だが、このつるみ朝のフィールドワークを通して、子供たちそれぞれは異なる考え方・感じ方をするということ、一

般論として論ずるのではなく、彼ら一人ひとりと向き合う必要があるということに改めて気付くことができた。と同時に、つるみ朝のルールとして（他のフィールドワークにおいても似たルールがあると思うが）「子供たちとプライベートな付き合いをしないでください」と言われ、自分と子供たちとの間には越えられない壁があるのも現実だな、とも感じた。

チーム：対話班      氏名：橋詰美緒

私がこの一年のゼミ活動の中でも印象的だったのが、外国につながる子どもたちの保護者へのインタビューです。私は、19年前にペルーから日本に移住してきたMさんにお話を伺いました。その中でとても意外だったのが、Mさんが「日本に来た外国人が外国人とばかりつるむのは甘えているだけで、もっと日本人と過ごして日本のことを勉強した方が良い」と言っていたことです。同じ外国人の立場でありながらそのようなことを言うMさんに最初は驚きましたが、日本に来てから自分に厳しく、たくましく、そしてどんな時も笑顔で明るく前向きに過ごしてきたMさんのお話はとても新鮮でした。インタビューの中で日本の良いところも沢山挙げていたMさんですが、今まで外国人嫌いの日本人から侮辱されたり、子どもがいじめや差別にあったり…と嫌な思いをした経験もあったそうです。それでも、そこで外国人だから…と嘆いたり、日本人への嫌悪感を抱いて終わるのではなく、不利な状況も自分で変えていこうとする前向きさや、物怖じせずにどんどん行動していくパワフルさを見習いたいと思うことが沢山ありました。また、子育てに関しても、子どもにどうなってほしい、子どもにはこう教育している…というような話を聞くうちに、だんだん「外国人のお母さん」にインタビューしているというよりも「一人のたくましいお母さん」から話を聞いているような感覚になり、私も将来こんな母親になろう…！と頷いてしまうこともよくありました。インタビューとしては本来良くないことなのかもしれませんが、最初私にとって「外国人のお母さん」という立場だったMさんが、話を聞けば聞くほど、同じ「女性」として共感できる場所が見えてきて、徐々に私の中で身近に感じるようになっていました。「多文化共生」と言うどうしても仰々しくてとっつきにくい感じがしてしましますが、「共感」すること、「共感」しようとするのは決して難しくないと思います。このように、対話を通して、共感することや共感できることを見つけることこそが多文化共生への一歩となるのではないかと改めて感じたインタビューでした。



奥村：私は、前期にはふれあい館の学習サポートと文化プログラムに参加し、後期はつるみ朝の学習サポートと最終日の紙相撲大会に参加した。

この一年を通して、さまざまな人たちと出会い、いろいろな経験をしたと思う。前期は、「塩原ゼミの学生」という意識が強かったのだが、後期に入るとフィールドワークの自由度が増し、一ボランティアのような気持ちでフィールドに入っていくことが多くなった。そのため、後期では自分やフィールドに関わる人びとの行動を客観的に分析することを忘れていってしまったような気がする。

その理由は後期においてフィールドノーツをつけることをしなかったためかもしれない。フィールドノーツを取らなかったことで、情情的にかなり自由になったような気がしたのである。例えば、「フィールド」に臨む際の気持ちも前期と後期では違った気がする。

前期の「フィールドワーク」では毎回フィールドノーツをつけることを義務付けられていたため、「参与観察」をしなくてはならないという意気込みがとても強かった。そのため、「フィールド」に行くときに「参与観察をする学生」として臨んでいたような気がする。前期の文化プログラムでフィリピン人のママたちの話を聞いた際にも、その言葉をただ受け取るのではなく、アカデミックな事象へ語りを置き換えていたような気がするのである。フィリピン人コミュニティの方々が語ってくれた言葉のアカデミックな意味や背景を考えなくてはいけないような気がして、私にとってフィールドノーツとは、彼ら・彼女らが語ってくれた言葉や私自身がその時に感じたことを、別の言葉や意味を付与するように書きなおすという作業を意味していた。でも、あの時、あの場所で感じたことはとても後で思い出して記録できるようなものではなかった。そのため、私にとってフィールドノーツをつけることは少し苦痛だった。あのとき語られた言葉は、フィリピン人コミュニティをエンパワーメントするために語られたものであるはずであり、アカデミックな言葉で書き換えていいものではないと思う。私はフィールドノーツを取ることによって、あのとき語りが行われたということの意味をとらえ損ねたような気がする。

後期ではABC ジャパンにて外国につながる小学生たちに学習サポートを行った。最後には小学生たちとかなり打ち解けて話せた気がする。それは小学生たちの言葉を別の言葉で置き換えるという作業を伴わなかったため、私自身がとても自由な気持ちで接することができたからかもしれない。

研究会として「フィールド」に赴いている以上、情報の共有手段としてフィールドノーツは取らなければならない。しかし、実際に語られた言葉や出来事を、一方的に別の言葉で強制的に無理やり置き換えるという、フィールドノーツを取る行為の持つある種の暴力的・権力的な作用に目を向け、なぜフィールドノーツを取るのか考え直したい。

チーム：対話 氏名：佐藤美織

「あなたは私たちのことをよく分かってくれているわね」

「もっかい！！」

ゼミ生には耳タコであろう、この二つの台詞。ご存じの通り、一方は私をしばらくの間相当憂うつにせしめた呪文、そしてもう一方はその全てを吹き飛ばすほどの光明の言葉である。

この一年、私は主に対話班と活字班の活動に携わっていた。方や大学生以上の年齢の方々と答えの出ない議論を戦わせ、方や小学生に覚束ない知識を結集して必死に勉強を教える実践。マージナルな社会に生きる人々と関わる度、次第に私のアイデンティティはバランスを崩し、残ったのは無残に破れた赤い旗だけに思えた。知れば知るほどに目標までの長い道のりばかりが目について辛いのに、一步踏み出す度に大切な荷物が消えていく。こんなちっぽけな私が何かして、果たして”世界”は変わるのか。変えられる場所にたどり着く前に、力尽きてしまいそうなのに。そんな旅は苦しくはないかと、自分に問いかけていた。

しかし、私の中に燻っていたこの暗い感情はあっさりと二つの出来事のおかげで消え去ることになる。一つは、「もっかい！！」。もう一つは、「フィールドが変わった。」。

「もっかい！！」は、FW 先の潮田小学校で中国人の子が叫んだ言葉。彼は日本語がまだ覚束なく、いつも兄弟と中国語で話していた。普段から他の子と殆ど話さず、それは活字班が主催したカルタの最中も同様であった。そんな彼が、終わった後もう一度やりたいと日本語で伝えてくれたのである。しかも、3回も。全身が一気に熱くなった。心臓が燃えたと思った。単純な”楽しい”ではなく、”もう一度したい”という彼の言葉が嬉しかった。そこからはもはや言葉は関係なく、日本語とポルトガル語と中国語が飛び交う中カルタが4回戦まで延長して行われた。単純に楽しい。だからもっと一緒にしたい。仲良くなったらもっと楽しい。共に「楽しむ」ことの重要性を実感した瞬間だった。

「フィールドが変わった。」は最後のゼミで塩原先生がおっしゃっていた言葉である。とあるボランティアさんの変貌、ふれあい館の受け入れ体制の軟化など、それまでは意識していなかった FW 先の変化に改めて気づかされた。今年一年間限定の視点からでは気づけない変化も、5年の視点ならばはっきり見て取れる。旅人が私一人ではなく、多文化共生に関わる全ての人と考えれば長い道のりでもリレーのように思いは繋がっていく。そしていつかはマジョリティ・マイノリティ関係なく、人々が誰とでも「もう一回」語ろう、会おう、楽しもうと思える場所にたどり着けるはずだ。みんなが歩みを止めない限り。

私は今まで苦しかった。むなしいと感じたことすらある。しかしそれは、「楽しむ」ということを忘れていたからであり、自分を大きな時の流れの中の一人として見るのが出来なかったからだ。今年の大きな収穫は、この二点に気づけたことである。

晴れた空の下、旅人は二輪のクロッカスを得て、再び歩き出す。あと一年楽しもう！

## 指導教員より

「時間」と「空間」について考えることが自分の仕事にとってどれほど大切かということ、今年度の **FRIENDS** プロジェクトでは改めて感じさせられました。春学期のはじめ、ゼミの学生になるべく長い時間フィールドワークに入ってもらいたいと思っていました。昨年度は川崎市ふれあい館だけだったフィールドが今年は横浜市鶴見区にも拡大したこともあり、学生たちはふれあい館学習サポート、文化プログラム、つるみ朝教室、つるみ夜教室、潮田小学校国際教室、鶴見総合高校などさまざまなフィールドで、学習サポート教室やお祭り・遠足への参加、インタビューの実施などをつうじて子ども・保護者・支援者との関わりを時間をかけて強めていってくれました。秋学期には、学生たちは学習サポートで培った子どもたちとのつながりを活かして懸命に実践に取り組んでくれました。1年間という時間をかけてフィールドに向き合う経験はゼミの学生たちの思考を深め、視野を広げてくれたと確信します。それはすぐに実感できる変化ではないかもしれませんが、これから長い時間をかけて学生のみなさんの人生に大きな影響を与えていくのだと思います。

ただし春学期のはじめ、なるべくすみやかに学生にフィールドに入ってもらおうとするあまりやや焦ってしまい、学生たちが十分に納得してフィールドに入る環境をつくれなかったことは反省しています。また秋学期の実践に関しては、時間のかけ方がまだまだ足りなかったと思います。これには、3年生の就職活動や子どもたちの入試が本格化する前に実践に区切りをつけておきたいという意識が僕の中にもあったことも影響しています。やむを得ない状況もあるとはいえ、せつかくゼミは2年間続くのだからもっと時間をかけて実践に取り組むべきだと強く感じており、来年度に向けた宿題のひとつです。

今年度のゼミ活動で大きく変わったのは、「三田の家」という空間に出入りするようになったことです。昨年度に三鷹天命反転住宅 (<http://www.architectural-body.com/mitaka/>) でゼミ合宿を行った経験から、教えたり学んだり対話することに「空間」がもたらす影響の大きさを感じていましたが、三田の家でゼミを行った効果は予想以上だったと思います。はじめて訪れた人もすぐに自分の居心地の良い位置や座り方を見つけて、他人の話に聴き入り、自分も語りだす。そんな環境で1年間討議を続けることができたことで、学生のみなさんの思考力は確実に高まったと思います。また訪れる人々に対して開かれたあの空間は、フリートーク企画などでの対話を通じて僕たちが他者への想像力を育てるのを手伝ってくれたのではないのでしょうか。

このゼミの活動にとって、フィールドが「アウェイ」ならば三田の家は「ホーム」ということになるでしょう。ホームとは居心地がよく、落ち着いて対話し考えを深めることができる場所。アウェイとは出会いやつながりに満ち、ときに自己が危うくなるリスクにあえて身をさらすことで現実への広い視野と他者への共感を育むことができる場所。どちらの場所も重要です。ホームとアウェイを往復する作業をこれからも時間をかけて続けてい

くことが、FRIENDS プロジェクト（仮称）なのだと思います。

2011年3月  
慶應義塾大学法学部  
准教授  
塩原良和



教室での授業風景



三田の家での授業風景

## FRIENDS PROJECT2011 の展望

ABC ジャパン、ふれあい館の皆さまのご協力を得て、塩原ゼミのフィールドは前年度よりも大きく広がりました。また前年度は映像作品の製作のみを行いましたが、本年度は活字媒体での表現やワークショップの開催など様々な新しいチャレンジも行いました。一方で、ゼミ生が活動ごとに細かくグループ化されたために他のグループの活動を共にシェアする事が難しくなり、ゼミの活動理念にブレが生じるという困難も生じてきました。こうした反省を踏まえ、2011年度はゼミの原点である映像制作を、外国につながる子ども達と協働して行う事で「自己の表現と他者のエンパワーメント」を実現できる様に、ゼミ生一体となって取り組んでいます。現段階ではプロジェクトの全容は未知数ですが、今年もワークショップや映像上映会の開催を通して活動の報告を行っていく予定です。塩原ゼミのHPや ([http://www.clb.mita.keio.ac.jp/law/shiobara\\_seminar/index.html](http://www.clb.mita.keio.ac.jp/law/shiobara_seminar/index.html)) 三田の家でのHP (<http://mita.inter-c.org/>) を通じて情報発信を行っていく予定ですので、ときおりチェックをして頂けると幸いです。本報告書をご覧下さり、ありがとうございました。

FRIENDS PROJECT2010 報告書

編集者：塩原研究会 小鞠誠人

発行者：塩原研究会

発行所：慶應義塾大学 塩原研究会

本報告書についてのお問い合わせは、下記までよろしくお願い致します。

[shiobara4ki@googlegroups.com](mailto:shiobara4ki@googlegroups.com)